

入
選

— 中学生以下の部 —

「少女の小さな願い」

伊藤彩杏さん

推 し 本：『探偵チームKZ事件ノート』

著 者：住滝良（原作：藤本ひとみ）

推したい相手：今、この作文を読んでいるあなたへ



「少女の小さな願い」 伊藤彩杏

その時、私はぎゅうっと心を掴まれて、魂が紙面の奥へ吸い込まれる気がした。今思えば、それこそが『探偵チーム KZ 事件ノート』の物語の中へ入っていく時の感覚だったのかもしれない。話を読んでいる時間も、読み終えて余韻に浸っている時間も、景色がいつもと全く違って見えた。『探偵チーム KZ 事件ノート』は、人間に大きな幸福をもたらす。今、この作文を読んでいるあなたへ、この幸福を送りたい。藤本ひとみ先生の繰り広げる世界である。主人公は立花彩。上手くいかない人間関係、兄弟との差、成績などで悩む生ける屍。大袈裟な表現だと思っただろうか。しかし、物語を読めば分かるはずだ。文字が表す立花は、嫉妬と自分の不甲斐なさで心が死んでいた。立花は努力している。ただ、ただ、その努力が実らないだけで。彼女の所々に入り混じる切ない嘆きに、よく、ぐゅうっと胸が締め付けられたものだ。そんな主人公の元にも、やがて光の欠片がこぼれ落ちる。それが、天才的な頭脳を持つ四人の少年との出会いだった。若武、上杉、黒木、そして小塚。彼らが、人生のどん底にいた少女を引っ張り上げ、能力を開花させることで蘇らせたのだ。ある事件を解決したことをきっかけに探偵チームを結成し、立花に生き甲斐を与えたのも四人だった。その場面が薄ら浮かんできただけで、濃い味の涙がコロコロあふれてくる。しかし、これは、四人の少年と一人の少女がこれから飛び込んでいくこととなる冒険の始まりの出来事にすぎない。どうして、『探偵チーム KZ 事件ノート』が人間に幸せを送るのか。それは、「人」、という生き物の心を楽しませる全ての要素が詰め込まれているからだと思う。ドキドキとスリルを味わい、ふとした瞬間に、きゅん、とときめいて。熱い友情、冷え切った感情を読み取った時に抱く不思議な気持ちが心を躍らせる。頭のとっぺんから足の先まで、そんな感覚になるのは初めてだった。自分から、恋愛がテーマとなっている本の世界の中に踏み込んだことはなかった。それは、現実味のない恋愛物語と私の間に、ピンク色の膜が張ってあったためだった。つまり、ときめけない。簡単に物語に入れなくて、一生に一度は味わいたい、スリルとは違うドキドキを感じられなかったのである。そんな私の元に舞い

降りた本、『探偵チーム KZ 事件ノート』は違った。探偵チーム KZ は、ただのミステリ小説ではない。学び、ときめき、感動、そして、ミステリを、きゅっと凝縮させた傑作。こんな素晴らしい本を、誰に推すかと聞かれたら。私はきっと、他でもない、今この作文を読んでいるあなたに推すだろう。なぜか、『探偵チーム KZ 事件ノート』の主人公、立花彩は若武たち四人と運命的な出会いを果たす。私は、あなたと、この作文の出会いも、「運命」だと感じている。絶対に探偵チーム KZ を読んで後悔はしないと断言する。人間性があふれでているキャラクター達に触れ、とんでもない事件を体験して、生きる楽しみを知ってほしい。たくさんの中から私を見つけてくれてありがとう。『探偵チーム KZ 事件ノート』を知ったあなたに、幸福が届いてほしい。